

『陰陽十一脈灸經』文字攷

林 克

一 はじめに

一九七三年末から七四年初頭にかけて長沙馬王堆三號墓から、大量の帛書・木簡・竹簡が出土した。内容的には六藝・諸子・兵書・術數・方技に及ぶ。醫藥とはほぼ同じ概念であるが、醫藥より幅の廣い方技に關していえば、出土資料は醫經・經方・房中・神僊の四部門を含んでいた。方技に分類される醫書の具體的な姿は『文物』一九七五年第六期の「馬王堆漢墓出土醫書釋文」(一)以降明らかになった。その一つが經脈の流注と病候を述べる『陰陽十一脈灸經』であり、方技の中では醫經に屬すものである。

馬王堆漢墓出土醫書には『陰陽十一脈灸經』と同じく經脈の流注と病候を述べる『足臂十一脈灸經』も含まれていたが、『陰陽十一脈灸經』と『足臂十一脈灸經』の記述内容には共通する部分と相違する部分があった。經脈の流注と病候を述べる醫書として現在まで傳承されたものに『靈樞』經脈、『太素』經脈連環、『甲乙經』十二經脈絡脈支別、『脈經』卷六があるが、『陰陽十一脈灸經』と『足臂十一脈灸經』はそれらの祖本と呼べるものであった。^①

馬王堆漢墓から出土した『陰陽十一脈灸經』は二本あった。一本は『甲本』と呼ばれ、『足臂十一脈灸經』『脈法』『陰陽脈死候』と『五十二病方』前半を含む帛書に書かれ、『足臂十一脈灸經』と『脈法』の間に位置した。もう一本は

『乙本』と呼ばれ、『却穀食氣』と同じ帛書に書かれ、『却穀食氣』の後に続くものであった。二本の記述はほとんど同一であるが、部分的に異なるところがあった。二本ともかなりの缺落があり、缺落部が二本で重複しないところでは、二本を対照することにより缺落部を補って読むことができた。また、前述の『靈樞』經脈・『太素』經脈連環などを参照することによって、缺落部の文字の推定を行うことができた部分もあった。

馬王堆古文獻の第一次研究は出土後約十年で出そろうが、丁度十年後の一九八三年から八四年にかけて、湖北省江陵張家山漢墓から出土した『脈書』には『陰陽十一脈灸經』『脈法』『陰陽脈死候』と同文が含まれていた。張家山漢墓出土醫書は竹簡に書かれ、帛書に比べ缺落が少なく、文字も明確に残存する場合が多かった。一九八五年三月には馬王堆漢墓出土醫書の寫眞版『馬王堆漢墓帛書』肆が出版され、一九八九年には「江陵張家山《脈書》釋文」(『文物』一九八九年八期)が發表されて、『陰陽十一脈灸經』の研究は新たな展開を迎えることとなった。ただ、張家山漢墓出土資料の寫眞版『張家山漢墓竹簡』の出版は二〇〇一年一月まで待たなければならなかった。

現在、馬王堆漢墓三號墓の出土から約三十年を經過しようとしており、これまでに多くの釋文・研究が發表されてきたが、未解決の問題がなお存在する。『張家山漢墓竹簡』の出版を機にそれらの解明を目指して、『足臂十一脈灸經』『陰陽十一脈灸經』『脈法』『陰陽脈死候』の徹底的な再検討を試みた。以下は、『陰陽十一脈灸經』の検討結果を提示するものであるが、スペースの関係で『陰陽十一脈灸經』中の七脈の主要な問題點に絞った。今回、發表することのできない『陰陽十一脈灸經』の検討結果や『足臂十一脈灸經』などの検討結果は稿を改めて發表する豫定である。

テキストは基本的に馬王堆出土の『甲本』を用い、『甲本』が缺如する場合は『乙本』で補い、『乙本』も缺如する場合は張家山出土『脈書』で補う。七脈の文字を考察するに當り、各脈の冒頭に本文を表示したが、【】は破斷・腐蝕などで『甲本』が缺如する部分を示し、()は『甲本』『乙本』ともに缺如する部分を示す。〔 〕はその直前の文字

の解釋を示す。論述の過程で使用する用語において、「讀む」とは出土資料の文字の字形をよみとること、「訓む」とはその意味をよみとること、「解す」とは某字であると解釋することである。「脱落」とは存在したと思われる文字部分が出土資料の破損により完全に脱落する状態、「缺损」とは出土資料の破損により文字の一部分が存在し、一部分が存在しない状態、「脱落」とは破損がなく、文字を明確に認識できる状態の出土資料において、存在が想定される文字が脱落して存在しない状態である。「缺损」には残存部分から当該文字を想像復元できる場合と、できない場合がある。「不鮮明」とは出土資料の寫眞版で文字がぼやけていたり、黒ずんでいて、字形を明確に認識しえない状態である。

なお、本稿「二」で使用する資料の略稱は左記の通りである。

『陰陽』——『陰陽十一脈灸經』

『足臂』——『足臂十一脈灸經』

『甲本』——『陰陽十一脈灸經』甲本

『乙本』——『陰陽十一脈灸經』乙本

『張家山本』——張家山漢墓出土『脈書』第二部分

『經脈』——『靈樞』經脈

『經脈連環』——『太素』經脈連環

『脈經』——『脈經』卷六

『甲乙經』——『甲乙經』十二經脈絡脈支別

『病法』——『五十二病法』（文物出版社、一九七九年一月）

- 『研究』——『新發現中國科學史資料の研究 譯注篇』（京都大學人文科學研究所、一九八五年三月）
- 『帛書』——『馬王堆漢墓帛書』肆（文物出版社、一九八五年三月）
- 『字形表』——『秦漢魏晉篆隸字形表』（四川辭書出版社、一九八五年八月）
- 『考注』——『馬王堆醫書考注』（樂羣文化事業有限公司、一九八九年十二月）
- 『（壹）』——『馬王堆漢墓醫書校釋（壹）』（成都出版社、一九九二年六月）
- 『脈書校』——『張家山漢簡《脈書》校釋』（成都出版社、一九九二年六月）
- 『校釋』——『馬王堆古醫書校釋』（湖南科學技術出版社、一九九二年一月）
- 『文字編』——『馬王堆簡帛文字編』（文物出版社、二〇〇一年六月）
- 『張家山』——『張家山漢墓竹簡』（文物出版社、二〇〇一年一月）

二 『陰陽十一脈灸經』の文字の再考

（一）鉅陽脈

【鉅陽脈〔脈〕、潼〔動〕外踝婁中（i）、出郄中（ii）、上穿脈〔腎〕、出厭〔厭〕中、夾〔挾〕脊、出於項、〔上〕頭角、下顏、夾〔挾〕髀〔髀〕、毳〔繫〕、毳〔繫〕目內廉。是僮〔動〕則病、潼〔腫〕頭、〔自以〕〔似〕脫、項以〔似〕伐〔拔〕、胸〔膺〕痛〔iii〕、要〔腰〕以〔似〕折、脾〔髀〕不可以運、肱〔郄〕如結、【膺如裂、此】爲踵蹶〔厥〕、是鉅陽脈〔脈〕【主治、其所產病、頭痛、耳聾、項痛、耳強】〔iv〕、瘧、北〔背〕痛、要〔腰〕痛、尻痛、時〔痔〕、

脛〔郚〕痛、膈痛、【足小指蹠〔痿〕（v）、爲十】二病。

(i) 動外踝婁中——『甲本』はこの五字を破斷に依って缺落し、『乙本』は「潼外踝婁中」に作り、『張家山本』は「毆於潼外踝中」に作る。「潼」について、『病法』『帛書』『考注』『壹』は「踵」と解し、意味としては「接する」(『病法』『帛書』)、「かかと」(『考注』)、「因る」「沿う」(『壹』)とする。『研究』は「衝」と解し、「當たる」「向く」「突く」の意味とする。なお、『考注』は「潼」の前に「繫於」「起於」「在於」等が脱落しているのではないかと云う。『脈書校』『校釋』は『張家山本』の「潼」を「踵」と解し、『校釋』は「かかと」の意味として、「毆於潼外踝婁中(婁は『乙本』により補うと云う)」を「外くるぶしの後とかかとの間の窪みに始まる」と解釋する。脈の起點の記述に注目すると、『足臂』に見える十一脈は「出」か「循」のいずれかであり、『甲本』『乙本』は鉅陽脈以外では「繫(于)」四例、「起(于)」四例、「在(于)」一例、「被」一例である。この内、「被」は唯一内臟(胃)から始まる太陰脈のもので、これ以外の四肢から始まるものと異なる。その特殊性を考慮して「被」を除くと、四肢から始まる起點の言葉は「出(でる)」「循(めぐる)」「繫于(にかかると)」「起于(におこる)」「在于(にある)」である。鉅陽脈の起點の言葉を考える場合、この五者に類するものと推定するのが最も適切である。鉅陽脈に續く少陽脈・陽明脈の流注が「繫於」「繫于」で始まっていることを考慮すると、「潼」は『張家山本』の「毆於潼外踝」と同じく「踵」であって、「繫於」あるいは「繫于」を脱文していると考えることが可能である。また、「潼」は「動」と諧聲字で通假する。「動」に「發」の意味があり、「發動」は「起こる」「起こす」を意味する聯文である。その他、「動」には「出る」「初め」「現れる」の意味もある。『說文解字注』十一篇上二には「沖、涌絲(わきでる)也、从水中聲、讀若動」とあり、水が湧き出ることの意味する「沖」は「動」のように發音する、と云う。これは「動」が「沖」と通假する可能性を示す。「水が湧

き出ること」は「出」「起(于)」に相當する表現であり、脈の起點の表現として相應しい。「繫於」または「繫于」を脱文するか、「動すなわち沖」の假借か、二つの可能性が考えられ、どちらも相應の妥當性を有するが、取りあえず『乙本』に従い「動」の假借と考える。他の脈の起點に「動」が見えないことについては、當時において十一脈が相互に聯絡していると考えていたかどうか不明であるが、足の鉅陽脈(太陽脈)を十一脈全體の起點と考へ、「動」すなわち「沖」ということで脈の始まりと捉えていたのではあるまいか。

(ii) 出郟中——この「郟」は『足臂』太陽脈一行目の「郟」と同じである。『足臂』太陽脈の帛書の字體について、『病法』『帛書』は「𠂔」と読み、「卻」即ち「郟」と解す。『帛書』の寫眞では、偏は「𠂔」と「𠂔」から成る「𠂔(ク)」ではないのは明らかで、「𠂔」と「𠂔」から成り、「𠂔(キヤク)」に近い。「𠂔」と「𠂔」とは形が似ているので、混用されることが多かった。「𠂔」は「𠂔」とも表記され、「𠂔」は「𠂔」や「強」「強」などの例から分かるように「𠂔」とも表記される。つまり、「𠂔」に似る偏は「𠂔」でありうる。『帛書』の寫眞で旁は「𠂔」或いは「𠂔」であるから、『病法』『帛書』が「𠂔」と読むこの字は「𠂔」或いは「𠂔」である。回り道をせずともストレートに「𠂔」或いは「𠂔」なのである。「𠂔」と「𠂔」は異なる偏旁であるが、『字形表』六四三頁で「𠂔」を「𠂔」に作る二例があり、書寫體としては混同されることがあった。また「𠂔(卻)」と「𠂔(卻)」はともに溪紐・鐸部で雙聲疊韻であることから、兩者は通假したと思われる。

『乙本』のこの字の寫眞版は不鮮明であるが、『文字編』三七六頁に擴大して掲載され、「𠂔」と読み、解せることは明白である。『張家山』は『張家山本』のこの字を「𠂔」と読むが、旁は上「𠂔」下「𠂔」に作る。「𠂔」は「𠂔」あるいは「𠂔」に作ることもあり、「𠂔」は「𠂔」となるから、旁は「𠂔」あるいは「去」である。つまり、この字は「𠂔」あるいは「𠂔」と読むべきであろう。「𠂔」であれば「𠂔」の別體、「𠂔」であれば「𠂔」の通假字と考へる。「𠂔」は

溪紐・鐸部であり、溪紐・魚部の「郟」とは雙聲・陰入對轉の關係にある。なお、後出の陽明脈の所産病において「心與肱痛」の「肱」の旁は明らかに「去」に作ることからすれば、「肱」と讀む方が正しいかも知れない。

(iii) 目似脫、項似拔、膺痛——『張家山本』は「似」を「以」に、「拔」を「伐」に作る。「以」と「似」は諧聲字で通假する。なお、「項似拔」を「經脈」は「項如拔」に作る。古典において餘紐・之部の「以」と日紐・之部の「而」は明らかに通假する^③。また、王力『同源字典』(以下、『同源』と略稱)に依れば日紐・魚部の「如」と「而」とは魚之旁轉である。以上から「以」と「經脈」の「如」の通假が推定できる。「伐」と「拔」はともに竝紐・月部で雙聲・疊韻であることから通假する。

「膺」について、『張家山本』は「胸」に作り、「經脈」などは「脊」に作る。『校釋』は太陽脈の流注は前胸部でなく、背部であることから、「胸」を「脊」の誤字とするが、この推定には疑問が残る。『字形表』二六九頁に、旁の上部が「夫」、下部が「貝」であるものと、旁の上部が「主」に似、下部が「月」に似て、旁全體が「青」に似るものの二例の「膺」が見える。この二例から上部を「夫」、下部を「月」に作る「脊」の存在が推測できる。同書二七二頁に背肉を意味する「膺」とその別體「臑」が見え、「膺」は旁を「無」に作り、「臑」は旁を「夫」に作る。上部を「夫」、下部を「月」に作る「脊」と、偏を「月」、旁を「夫」に作る「臑」は讀み誤りを生じる可能性が高い。「膺」の古代音に明紐・魚部と曉紐・魚部の二音があり、後者は曉紐・東部の「胸」と雙聲である。また、背肉を意味する「膺」の古代音は明紐・之部であるが、この諧聲字である「海」「悔」「誨」は曉紐・之部であり、「膺」も「胸」と雙聲の可能性がある。以上を纏めると、當初、鉅陽脈の流注經路にある「臑」の痛みと書かれたものを一方で音韻的類似に依って「胸痛」と書き誤り、他方で形態的類似に依って「脊痛」と書き誤った。「胸痛」は『張家山本』に傳承され、「脊痛」は「經脈」などに傳承されたが、當初の「臑痛」すなわち「膺痛」は傳承が途絶えたと推測される。

〔別考〕 曉紐・東部の「胸」と旁紐・陰陽對轉の關係にある字が疑紐・侯部の「偶」である。「偶」は「肩前」すなわち「かたさき」を意味する。鉅陽脈（足太陽脈）は肩前を通過しないが、足太陽之筋には「其支者、從腋後外廉、結于肩髀」とあって、肩髀を通過する。『張家山本』の「胸痛」は「偶痛」と考えることができる。ただ、「偶痛」という表現は古典醫書に見えない。「偶痛」は「胸痛」に依って僅かに存在の痕跡をとどめ、「胸痛」は鉅陽脈の流注部位から外れるために、雙聲の「膺痛」「臑痛」にとって代わられ、更に「臑」から「脊痛」と變化した。先の推論に比べ、前提条件が多い點が問題である。附記して後考に待つ。

(iv) 其所産病、頭痛、耳聾、項痛、耳強——この十二字、『甲本』は缺失し、『乙本』『張家山本』に依る。『乙本』は「強」を「彊」に作ると云うが、寫眞は不鮮明である。『張家山本』は「其所産病」を「其所之病」に作り、「耳強」を「濇強」に作る。「經脈」「經脈連環」「甲乙經」「脈經」は「其所産病」に該當する部位を「所生病者」四字に作る。「耳強」について、『考注』は「耳部の強硬腫脹など」ではないかとするが、「耳強」は傳承された醫藥の古典に見えないという難點を持つ。「彊」「強」と「張」は通假し^④、そこから「張」の諧聲字「脹」と「彊」「強」との通假も推定することができる。つまり、「耳強」は「耳脹」であるかも知れず、「耳強」ならば「耳部の強硬」、「耳脹」ならば「耳部の腫脹」を意味することができる。『考注』の「耳部の強硬腫脹など」を音韻的根據のある表現と認めることができる。しかし、「耳強」が「耳脹」であったとしても、文献的根據に缺けるといふ難點は消えない。『壹』は「耳強」を「項強」のことだとし、「項強」は太陽脈の病候としては申し分ないが、「耳」と「項」の關聯が明白でないという難點を持つ。『校釋』は『張家山本』が「耳強」を「濇強」に作るのを受け、「濇強」は「枕強」の通假字であるとし、「枕強」について「後頭頸部の筋肉が痙攣して引き起こすこわばった感じ」であり、「項強・項似拔などの症狀と基本的に同じ」と云う。「枕強」は音韻的には十分成立するが、「耳強」と同じく醫藥の古典に見えないという難點を持つ。

この部分の解釋としては「耳」と「灋」に共通する解釋が最も適切である。『說文通訓定聲』臨部第三「𦉰聲」に「灋、…假借爲潛」とあり、「灋」「潛」は通假する。『尚書』洪範の「沈潛剛克、高明柔克」を『左傳』文公五年は「商書曰、沈潛剛克、高明柔克」に作る。これによって「灋」「漸」の通假が考えられる。『素問』骨空論に「其病上衝喉者、治其漸、漸者、上俠頤也」とあり、「漸」は身體部位の名稱である。「上俠頤也」について、王冰は大迎穴のこととするが、異説もある。しかし、「頤」すなわち下顎附近であることは間違いない。耳と頤は近い。『陰陽』の鉅陽脈の流注に耳は記述されないが、鉅陽脈に相當する「經脈」などの太陽脈の流注には「巔から耳の上角に至る」と記載される。耳附近の病候が太陽脈に存在してもおかしくはない。「耳強」と「灋強」はともに耳から頤あたりの硬直・腫脹を指すと推定することができる。ただ、残念ながら、これも典據がない。ついでながら『校釋』は「耳」と「灋」は古音が互いに異なるので互通しないと云うが、この見解には疑問が残る。「灋」は「𦉰」聲の形聲字であり、「灋」「𦉰」は潛・僭・簪・譖などと諧聲字である。『周易』豫卦、九四爻辭「朋盍簪」の『釋文』に「虞作𦉰」とあり、虞翻『周易集解』は「朋盍𦉰」に作る。章紐・職部の「𦉰」と日紐・之部の「耳」は兩者ともに聲母が舌上音で、韻部は陰入對轉の關係にある。つまり、「簪」が「𦉰」と通假するならば、「簪」と「耳」も通假の可能性があり、さらには「灋」と「耳」の通假もあり得よう。

典據という観点から、「耳」を同じ日紐・之部の「而」の假借ではないかと考える。『說文解字注』十二篇上の「耳」の注には「凡語云而已者、急言之曰耳」とあり、「耳」と「而」の通假の可能性を示唆する。「耳」が「而」の假借であるならば、「耳強」は「而強」となるが、これを前の二文字と合わせた表現が『素問』刺熱論に見える。「腎熱病者、…熱爭則項痛而強、斂寒且痠、足下熱、不欲言、…刺足少陰・太陽」である。「腎熱病」とは言うものの、王冰は「項痛而強」に對して「膀胱之脈、從腦出別下項」と腎と表裏をなす足の太陽膀胱經に關聯づけた注釋を施し、引用文末にも

「足（少陰・）太陽」とあって、足太陽脈に關聯する記述であることは明白である。ここに見える「項痛而強」こそ『陰陽』を傳承する文言ではないだろうか。音韻と典據の二點で「枕強」より「而強」が優れる。

以上の考察により、「耳強」には「耳強」「項強」「枕強」「耳から頤あたりの強」「而強」の五つの解釋があるが、その何れも一長一短がある。そこで、文字としては「耳強」、意味としては「耳から頤あたりの硬直・腫脹」を暫定的に採用しておきたい。

(v) 足小指痿——『甲本』はこの四字を缺落し、『乙本』は「足」「指」の半分と「痿」を缺落し、『張家山本』は「痿」を「蹠」に作る。少陽脈にも「足小指痿」が見え、『甲本』は「足中指」三字を缺落し、『甲本』『張家山本』は「痿」を「蹠」に作り、『乙本』は寫眞版が必ずしも明瞭ではないので、『帛書』に依れば「痿」を「溼」に作る。『甲本』の「蹠」について、『病法』『帛書』は「もと痺を蹠と書き、それを誤寫して蹠と書いたと推測する」と云う。『甲本』が「足小指蹠」に作ると想定することは、「經脈」の「小指不用」に對應するもので、一つのあり得べき解釋と言える。しかし、「蹠」が不用を意味する「痿」の通假字と言えるならば、誤寫説よりは妥當性が高い。『說文解字注』十二篇下「嫫」の説解に「讀若騶、一曰若委」と云う。これは「嫫」を「騶」あるいは「委」と發音することがあったことを示し、更に「嫫」の諧聲字「蹠」を「委」「痿」と發音した可能性がある事を示す。つまり、「蹠」は「痿」の假借である可能性がある。『說文解字注』七篇下に「痿、痺也」とあり、また「痺、濕病也」とある。意味的に「痺」と同じで、音韻的に「蹠」と繋がる「痿」の優位は明白であろう。

陽明脈〔脈〕、【穀〔繫〕】於肝骨外廉、循肝而上、穿臑、出魚股【之上廉、上】穿【乳】、穿【頰、出目外】廉、環
【顏】、是動則病、洒洒病寒、喜龍〔齡〕(i)、婁〔數〕吹〔欠〕(ii)、顏【黑、病腫、病至則惡人與火、聞】木
音則憊〔惕〕然驚(iii)、心腸〔惕〕欲獨閉戶牖而處(iv)、【病甚】則欲【乘高而歌、棄】衣【而走、此爲】肝蹶
〔厥〕、是陽明脈〔脈〕主治。其所產病、顏痛、鼻肌〔魋〕、頷〔頷〕【頸痛、乳痛】、心與脘痛(v)、腹外種〔腫〕、
陽〔腸〕痛、郛〔膝〕跳、附〔跗〕□□〔上痿〕(vi)、【爲】十【病】、(□□は二字分の缺落を表す)

(i) 喜齡——『甲本』は「喜龍」に作り、『乙本』『張家山本』は「喜信」に作り、「經脈」は「善呻」に作る。『素問』が「善」に作るものを『太素』は「喜」に作るが多い。⁵⁾これは「善」と「喜」の通假を示すものであり、この「喜」もこの「しばしば」「ややもすれば」「さかんに」等を意味する「善」と同じである。『病法』『帛書』は帛書『老子』乙本が「是胃曳明」に作るものを今本が「是謂襲明」に作ることを指摘し、『甲本』のこの箇所は本來「申」に作ったが、「申」を誤って「曳」に作り、その上假借して「龍」字としたと推測する。『病法』『帛書』の論述は正確には、「曳」を更に假借して「襲」とし、「襲」を略して「龍」とした、とすべきものであろう。「龍」が「襲」の略體であるならば、「龍」は「龕(≡龕)」の略體であるとも言える。『說文通訓定聲』臨部第三の今之六十一名「龕」字下に「本此又爲吟」とある。『說文解字』で「吟、呻也」「呻、吟也」である。とすれば、(イ)この「龍」は「龕」の略體で、「呻吟」を意味する。また、次の様にも考えられる。「吟」の或體に「齡」がある。「齡」の偏は「龍」の偏とよく似ている。『字形表』の「龍」字下に見える「龍淵宮鼎」「新嘉量二」の「龍」の偏は「音」と紛らわしい。「齡」の旁「今」の第四畫「フ」は小篆では向きが左右逆のものがある。この様な「今」は「龍」の旁「亘」を略したものにやや似る。つまり、(ロ)ここの「龍」は「齡」を讀み誤ったか、書き誤ったか、その兩方か、のいずれかであると想像できる。

以上の推論により、(イ)であっても(ロ)であっても、「龍」は「吟」即ち「吟」であろう。

(ii) 數欠——『甲本』は「婁吹」に作り、『乙本』『張家山本』は「數吹」に作る。「經脈」「經脈連環」「甲乙經」「脈經」は「數欠」に作る。「欠」と「吹」に音韻的な關聯はないようである。ところで、『說文解字』には「吹」字が二箇所に収録されている。二篇上の口部には「吹、嘘也、从口从欠(小徐本是从口欠)」、八篇下の欠部には「吹、出氣也、从口从欠」とある。また『說文解字』には「嘘、吹也、从口虛聲」とあり、「吹、嘘也」と「吹、出氣也」は同じ事を異なる言葉で表現しているとも考えられる。『說文解字注』で段玉裁が欠部の「吹」は削った方が良いと言っているのは、この様な見方に基づくものである。しかし、『玉篇』に引く『聲類』には「出氣急曰吹、緩曰嘘」とあり、これを『說文解字』に應用すれば、口部「吹」と欠部「吹」は出氣という點では共通するが、一方の「吹」は出氣が急、一方の「吹」は出氣が緩と解釋する事ができる。この解釋が許慎の眞意と合致するかどうかは不明であるが、二箇所に分けて「吹」字を収録する許慎の意圖の概略を説明できると考える。口部と欠部の二つの「吹」のどちらが出氣が急で、どちらが出氣が緩であるか不明であるが、アクビの「欠」を意味する欠部に屬する「吹」が呼氣の出し方の點で出氣が緩の「吹」と想定できる(この場合、口部「吹」は出氣が急となる)。恐らく、「欠」はアクビ全體を表現し、欠部「吹」はアクビの呼氣面だけを表現したと推測できる。「欠」の代わりに音韻的に關聯の薄そうな「吹」が使われていることは、口部「吹」と欠部「吹」には元來違いがあり、欠部「吹」が「欠」と意味的に關聯があったが、それは「欠」に吸收され、殘る口部「吹」だけが後代に傳承されたことを示唆するのではないだろうか。一つのあり得べき可能性と考える。必ずしも適切な比喻とは言えないが、出氣の緩急の區別によって口部と欠部に別記される「吹」はある點で「賣・買」に分化する直前の「買」、「授・受」に分化する直前の「受」のようにも思われることを附記しておきたい。釋文に當たっては『病法』『帛書』に従い、「數欠」と解する。「婁」と「數」は諧聲字で通假する。

(iii) 聞木音則惕然驚——『甲本』は「聞」字を缺落する。「惕」、『甲本』は「憊」に作り、『乙本』は「易」に作り、『張家山本』は「狄」に作る。『病法』『帛書』は「經脈」の「惕」と解し、「憊」は誤字、「易」は假借字とし、『校釋』もほぼ同様に「憊」「易」は誤字、「狄」は假借字とする。『脈書校』は「狄」を「惕」と讀解する。「易牙」とする例はよく見られ、『說文解字』心部には「惕」の別體に狄聲の「愁」が見え、「惕」「易」は諧聲字であるから、「易」「狄」は「惕」の假借字と解するのが正しいであろう。「憊」は「惕」の誤字とするのが妥當なように思われるが、一考の餘地がないわけではない。「憊」は「惕」の別體と考えられ、「惕」と「傷」は諧聲字であり、『爾雅』釋詁下に「傷、思也」、『釋文』に「傷、字書作惕」とあって通假する。「惕」「傷」はまた「易」の諧聲字である。「易」は餘紐・陽部で、餘紐・錫部の「易」とは雙聲である。古典においては雙聲だけで通假することがある。『同源』に依れば清紐・錫部の「刺」と初紐・鐸部の「籍」「藉」は「同一詞」であり、錫部と鐸部が旁轉しているという。これを根據に、陽部の入聲が鐸部であるから、「易」と「易」が通假する可能性があると言うことができる。また、『同源』に依れば、「嬰」と「鞅」、「經」と「綱」、「脛」と「胫」、「挺」と「杖」、「冷」と「涼」、「青」と「蒼」、「省」と「相」、などは耕部（錫部の陽聲）と陽部との旁轉の例である。これらも「易」と「易」の通假の可能性を示すものである。以上から、斷言はできないものの、「易」と「易」の通假が考えられ、「易」の諧聲字「惕」と「易」の諧聲字と推定できる「憊」との通假も考えられるのである。次項參照。

(iv) 心惕欲獨閉戶牖而處——『甲本』は「心腸」に作り、『乙本』にこの二字なく、『張家山本』は「心惕然」三字に作る。ここの始めの二字と類似する語句が足少陰之脈の是動病に見え、『甲本』は「心腸」に、『乙本』は『病法』『帛書』に依れば「心易」に、『張家山本』は「心狄狄」に作り、これに該當する「經脈」「脈經」は「心惕惕」に作る。恐らくこれを根據に『病法』『帛書』は「腸」を「惕」の誤字とする。『校釋』は、「惕」と「腸」は上古音が透・定旁

紐、錫・陽旁對轉の同源字であり、「腸」は「惕」の假借とする。「腸」と「惕」の関係については『校釋』説を是とする。前項の「憊」は「傷」の諧聲字と考えられ、「傷」は昌紐・陽部で、「腸」とは疊韻である。これにより、「憊」を「惕」と解するならば、「腸」もまた「惕」と解することができ、この「心」の下が「惕」である可能性は十分ある。しかし、足陽明脈については「經脈」「經脈連環」「甲乙經」は「心欲動」に作り、「脈經」は「心動」に作る。「腸」は定紐・陽部、「動」は定紐・東部であり、二字は雙聲である上に旁轉の可能性がある。音の近さとしては「腸」と「惕」よりも「腸」と「動」の方がずっと近い。この點からすれば、『脈經』に従いたくも思う。「心動」とは心が動揺することを意味する。結局、「腸」を「惕」「動」のどちらに解するかといえば、『陰陽』においては「惕」と解していたと推定する。當初、「惕」と解されていた「腸」が傳承され、讀み繼がれていく過程で、音の近さという點で「動」と解され、文字として固定していったものが「經脈」「經脈連環」「脈經」に見られる「心(欲)動」であると推測する。なお、六經脈の古い病候を伝える『素問』脈解篇(以下、「脈解篇」と略稱)において、陽明脈は「欲獨閉戶牖而處」のみで「心惕」や「心欲動」がなく、少陰脈は「恐如人將捕之」のみで「心惕」や「心惕惕」がない。あるいはこれが陽明脈・少陰脈の病候の古態を残すものかも知れない。

(v) 心與胛痛——『甲本』は「心」の上半と「與」の下半を缺損する。『乙本』は「與」と「胛」字の旁とが不鮮明である。『張家山本』は本句の前に「腎痛」二字がある。『脈書校』は、「腎」は聲母が同じ牙音で、韻部が之・元對轉の「脛」に通じ、「脛」は「胃脛」であると云う。『校釋』は『廣雅』釋親の「胛・腎、膈也」を引き、「腎」は「ふくらはぎ」ではあるが、これでは陽明脈の流注と關係がないので、雙聲關係にある「胛」の通假であるとする。「腎痛」が「乳痛」と「心與胛痛」の間に記載されていることからすると、「腎」は部位的に胸部・腋下・脇肋あたりであろう。従って部位的には『校釋』説が優れるが、そうだとすると、「心與胛痛」とともに「胛痛」が重出するという難點があ

る。『校釋』自體が「腎痛」の「祛痛」を衍文とするのは、まさにこの難點に気づいているからに他ならない。「胃脘」であると部位的に少し下に過ぎる感じがしないでもない。しかし、「胃脘」が胃の上口（噴門）あたりを指すか、あるいは食道を含意するならば、「脘」でありうる。「腎」の韻部は、『校釋』は之部とするが、郭錫良『漢字古音手冊』に依れば脂部である。聲母が「腎」と同じく喉音で、韻部が「腎」と脂・眞對轉で「胃」を意味する字に「脘」がある。音韻的には「脘」より「脘」の方が近い。「脘」であれば噴門あたりを指すものである。『腎』が「脘」以外の身體のある部位か、ある要素を意味していた事も考えられる。部位とすれば上記の胸部・腋下・脇肋あたりである可能性が高い。人體の部位を表す漢字で、「膊」は「肩胛」や「肩」と同時に「脯（ひざばね）」の意味を持ち、「髀」は「股」の他に「肩」や「脅」の意味を持つ。これと同様に「腎」も「膈」の他に「肩」ないし「胸」の意味を持った可能性がある。それが時の推移に伴って「肩」ないし「胸」の意味が廢れ、「膈」の意味だけが残ったかも知れない。身體の部位・要素とすれば『莊子』養生主の「肯綮」との關聯が考えられる。『經典釋文』によれば「肯」は「著骨肉也」、「綮」は「司馬云、猶結處也」であり、この解釋が廣く行われているが、「肯綮」は聯文で「綮」も「著骨肉」と解する事ができる。「著骨肉」であるならば、それは身體の何處にでも存在するが、その典型として先ず思い浮かぶのがスペアリブ即ちあばら骨についた肉である。「綮」と「腎」は諧聲字で通假していると推定でき、「腎」がスペアリブを元來意味していたとすれば、「腎痛」は肋間神經痛を指したのではなかったらうか。一つの可能性として擧げておきたい。明確に言えるのは、胸部・腋下・脇肋あたりのある部位の痛みに違いないということである。

(vi) 膝跳、跗上痿——『病法』『帛書』に従えば、『甲本』はこの五文字を「膝跳附□□」に作り、『乙本』は「膝足管涔」即ち「膝足痿痺」四字に作る。『張家山本』は「𦓐𦓐𦓐上𦓐」五字に作る。『甲本』の「跳」字を『考注』は「𦓐」の誤字とし、『張家山本』の「𦓐𦓐」を『脈書校』は「跳」とし、『張家山』は「外(?)」とする。『甲本』の「跳」字の

寫眞を見ると、偏が「足」であることは明白である。「兆」と解された旁は鮮明ではあり、秦漢の「兆」と類似する部分もあるが、類似しない部分もあり、「兆」と断定することに躊躇を感じる。しかし、他に適切な釋文が思い浮かばないので、『病法』『帛書』に従って「跳」と讀んでおく。『張家山本』の「□」の寫眞で、偏は全體として不鮮明であるが、比較的明白な「p」に似た部分とその下部に第一畫の長い「山」に似た不明確な模様が見られ、旁は明確な「ヒ」である。偏は「足」ではなく、「夕」の可能性も低い。旁の「ヒ」は『甲本』『乙本』では「外」の旁「卜」の小篆を表すが、『張家山本』で「外」の旁「卜」の小篆はそのまま「卜」字形で表されるので、「□」は「外」ではない。この字は旁の一部が『甲本』と同じなので、明確な根據はないが、「跳」と讀んでおく。『病法』『帛書』は『說文解字』の「跳、蹶也」を引き、「蹶、僵也」を踏まえて、「跳」を「僵直」即ち「強直」（關節部が障害で動かなくなる）と解する。『校釋』は『甲乙經』卷九に「陰跳」という病名が見えることを根據に「膝跳」を病名と考え、「跳」を雙聲字の「痛」の通假とするが、耕部の「跳」と宵部の「痛」の通假の實例は擧げていない。「膝跳」が一つの病名であるならば、「跳」を雙聲で陰入對轉關係にある「蹕」（あしなえ、正しく行かない様、定まらない様）と解するのがよい。音韻的に最も可能性が高いのは「蹕」、次が「痛」となるが、醫藥の古典には「膝跳」「膝蹶」とともに「膝蹕」も見えない。その點では「膝痛」が優る。『甲本』は『病法』『帛書』に依れば「膝跳」と「跗□□」、『校釋』に依れば「膝跳」と「跗上痺」であり、二病と解している。『乙本』の「膝足痿痺」は『甲本』の「膝跳」と何らかの關係で對應していると推測できる。この前提に立てば「膝足痿痺」は膝や足がなえることであるから、「膝跳」二字の意味としては「膝蹕」が最も優れ、「膝蹶」「膝僵」がこれに次ぐ。「膝跳」が一病名であるならば、音韻および『乙本』との對應の二點から見て、「膝蹕」と解するのが現段階での最良の解釋と考える。「附」「柎」は「跗」であるとする『病法』『帛書』『張家山』に従う。『甲本』の「□□」は『張家山本』の「上蹕」と推定する。「蹕」は「痿」の假借である。鉅陽脈（v）参照。

(三) 齒脈

齒脈〔脈〕、起於次指與大指、上出臂上廉、入肘中、乘臑、【穿】頰、入齒中、夾〔挾〕鼻。是【動】則病、齒痛、
𩑦〔頤〕種〔腫〕(i)、是齒脈〔脈〕主治。其所產病、齒痛、𩑦〔頤〕種〔腫〕、目黃、口乾、臑痛、爲五【病】。

(i) 頤腫——『甲本』は「𩑦種」に作り、『乙本』は「𩑦腫」に作る。『張家山本』は二字の旁の「出童」だけが残る。『廣韻』には「𩑦、𩑦臀」、「集韻」には「𩑦、當沒切、臀也」などとあって「𩑦」は「シリ」や下肢の一部を意味し、身體の上部の疾患に關係する齒脈の病候名としては適當ではなく、『病法』『帛書』が「頤」と解するのを妥當だと『研究』は云う。この指摘はその通りであるが、何故シリを意味する「𩑦」が目の下の部分を意味する「頤」の通假字となるのか。『說文解字注』卷八上・尸部に「尻、𩑦也」、「尻、𩑦也、从尸下𠄎𠄎几、𩑦、尻或从肉隹、隹聲也、與肉部𩑦字義同字異」、臀、尻或从骨殿聲」とあり、同書卷四下・肉部に「𩑦、尻也、从肉隹聲」とある。「隹」は心紐・文部、「𩑦」は禪紐・微部で両者は諧聲字である。「隹」「𩑦」の諧聲字に「准」「準」があり、『漢書』高帝紀の「隆準而龍顏」の注に「服虔曰、準音拙、應劭曰、隆・高也、準・頰權準也、李斐曰、準・鼻也」とある。シリを意味する「𩑦」「𩑦」の諧聲字「準」にホホボネ・ハナバシラの意味がある。同じ諧聲字でありながら、「𩑦」はシリを意味し、「頤」は眼下部を意味するのも、「𩑦」「𩑦」と「準」の關係と全く同じと言える。諧聲字であるから、同じ字がシリにも眼下部にも使われることがあり得るのである。どちらの意味に取るかは文脈に依るしかない。顔師古は服虔・應劭を非とするが、恐らく服虔・應劭は「𩑦」を「頤」の意味に使うような實例を見ていたに違いない。それが顔師古の時代

までは傳承されず、顔師古の非難するところとなったものであろう。

(四) 太陰脈

大〔太〕陰脈〔脈〕、是胃脈〔脈〕毆〔也〕。彼〔被〕胃、出魚股陰下廉、臑上廉、出〔內〕踝之上廉。是動則病、上〔當〕〔54〕走心〔i〕使復〔腹〕張〔脹〕、善噫、食欲歐〔嘔〕、得後與氣則怏然衰、是鉅陰脈〔脈〕主治。其所〔產〕〔55〕〔病〕、獨心煩死、心痛與復〔腹〕張〔脹〕、死、不能食、不能臥、強吹〔欠〕、三者同則死、唐〔漚〕泄、死、〔水與〕〔56〕閉、同則死、爲十病〔ii〕〔57〕、

〈 〉内の數値は『帛書』寫眞版に記載された行數

(i) 上當走心——『甲本』は帛書下部が缺損しており、この附近で殘存するのは「上」を含む第五四行下端が「上」まで、五三行下端は齒脈の「五」まで、第五五行下端は「所」までである。第五三行下端は『張家山本』により「五」下に「病」字があったことが確實に推定でき（不明瞭であるが『乙本』も「爲五病」はある）、第五五行下端も『張家山本』により「產病」二字あるいは「產」字があったことは疑いない。とすると、第五四行の「上」下に缺字が存在し、第五五行上端の「走心」に續くものと當然豫想される。都合良く、『乙本』が「上當走心」に作るのを根據に『病法』『帛書』が「上」下に「當」字を補うのは極めて合理的である。ただ、『帛書』の寫眞から『乙本』が「當」字に作っているのかどうかを判斷することはできない。この點で「當」字であるとする『病法』『帛書』の主張に當否の判斷を下げないという問題は殘すものの、『病法』『帛書』に従い「當」字を補う。『張家山本』には「當」字はなく、「上走心」

三字に作る。『校釋』は「當」を衍文とし、「脈解篇」に「上走心爲噫」とあることを指摘する。「脈解篇」は十二經脈の病候を主として時令思想によって解釋するものであるが、足太陰脈の病候だけを抜き出すと「病脹、上走心爲噫、食則嘔、得後與氣、則快然如衰」である。^⑦これに對應する部分を『甲本』と「經脈篇」から抜き出し、『甲本』「脈解篇」
「經脈篇」の順に並べてみた。

是動則病、上當走心、使腹脹、善噫、食欲嘔、得後與氣則快然如衰、（『甲本』）

病脹、上走心爲噫、食則嘔、得後與氣則快然如衰、（『脈解篇』）

是動則病、舌本強、食則嘔、胃脘痛、腹脹、善噫、得後與氣則快然如衰、身體皆重、（『經脈』）

三本を對比すると次の様なことが言える。『甲本』と「脈解篇」は全體としてよく似ており、「脈解篇」の記述は「脈解篇」ができた頃の「經脈」（あるいはその祖本）の内容を反映している。「脈解篇」の「上走心爲噫」は、『甲本』では「使腹脹」を挟んで記述された「上走心」と「善噫」が「爲」を挟んで前後に接したものであり、「上走心」が原因で「噫」がその結果として起こる病候と考えられる。この推定が正しければ、『甲本』の「上當走心」と「使腹脹」も二つの病候名であるよりは「上當走心」が原因、「腹脹」が結果としての病候名で、「使」が「爲」と同様の働きをしていると考えられる。『校釋』は「使」字を衍文ではないかと疑っているが、「上走心」と「使腹脹」を二つの病候名とすれば當然に生じる疑問である。「上走心使腹脹」を一句とすれば全く問題を生じない。新たな句讀に依れば、病候名では『甲本』と「脈解篇」がどちらも四つであり、その四名がほぼ等しい。「經脈」は病候名が七つであり、『甲本』と「脈解篇」に比べ、「舌本強」「胃脘痛」「身體皆重」が多く、原因の「上走心」が落ちている。「經脈」で「上走心」が落ちた理由はなんだろうか。「脈解篇」が書かれた時代には足太陰脈の是動病に「上走心使腹脹」と「上走心爲噫」の二種類のテキストが存在したと思われる。この齟齬を解消することと、「上走心」が病候を引き起こす原因であって

削除してもあまり影響がないことの二點に依って「上走心」が抹消されたと考える。なお、「當」字のない『張家山本』は『甲本』『乙本』と「脈解篇」の間に位置するものであろう。

(ii) 爲十病——『甲本』、「爲」は左側の一部を残すだけ、「十」は縦の一畫を缺損し、「病」は右側の一部を残すだけである。「十病」について、『病法』『帛書』は□□・心煩・心痛・腹脹・不能食・不能臥・強欠・溇泄・水・閉の十の病候を想定していると思われる。『脈書校』は獨心煩死・心痛・腹脹・不能食・不能臥・強欠・不能食不能臥強欠同時出現・溇泄・水腫(水)・小便不通(閉)とする。『校釋』は□□を□獨とするが、他は『病法』『帛書』と同じ。『病法』『帛書』『脈書校』『校釋』ともに「與」字の有無について配慮が見られない。「心痛與腹脹」と「心痛()腹脹」、「水與閉」と「水()閉」、「不能食()不能臥()強缺」と「不能食()不能臥與強缺」はそれぞれ同じであろうか。異なると考えるのが常識的な判断であろう。「與」がなければそれぞれが別個のもの、「與」があれば二者以上が並存すると考えるのがあり得べき判断である。あり得べき判断に従えば、太陰脈の所産病は七病となる。ところが、『甲本』を除き、『乙本』『張家山本』は確かに「十病」に作る。これは書寫の際に「七」を「十」と読み誤った結果として生じたものと思われる。『字形表』に依れば、「十」も「七」も秦と前漢における基本形は「十」(プラス記號)である。何處が違うかと言えば、「十」は縦の一畫が長く、「七」は横の一畫が長い。しかし、前漢の「十」には横の一畫が長く、「七」と見分けがつかないものが『字形表』に見える。馬王堆や張家山の『陰陽』以前に「七」を「十」と読み誤り、読み誤りのままで書寫したものがあり、それが馬王堆や張家山の『陰陽』に傳承されたと推定する。

(五) 厥陰脈

厥陰脈〔脈〕、毆〔繫〕於足大指鼓〔叢〕【毛】之上、乘足【跗上廉】、去內踝〔踝〕一寸、上【踝〔踝〕】五寸而
【出大〔太〕陰之後】、上出魚股內廉、觸少腹、大〔達〕漬〔皆〕旁〔i〕。是動則【病、丈】夫則【隤〔癩〕山
〔疝〕、婦人則少腹腫、要〔腰〕甬〔痛〕】不可以仰〔仰〕、甚則噤乾、面疵、是厥陰脈〔脈〕主治。【其】所產病、
熱中、【瘵〔癰〕、積〔隤〕、扁〔偏〕山〔疝〕、爲五病、五病】有而心煩、死、勿治毆〔也〕、又〔有〕陽脈〔脈〕
與之【俱】病、可治毆〔也〕、

(i) 觸少腹、達皆旁——「達」を『甲本』『乙本』は「大」に、『張家山本』は「夾」に作る。「觸」、『甲本』は不鮮明、『乙本』も不鮮明だが、『文字編』に採用されている。『張家山本』は明確である。「皆」を、『甲本』は不鮮明だが『病法』『帛書』に依れば「漬」に作り、『乙本』も不鮮明だが『帛書』に依れば「資」に作り、『張家山本』は「紿」に作る。「皆」「眦」と「漬」は通假し、「皆」と「資」も通假する。『脈書校』は「紿」を「肺」と讀解し、「夾紿旁」を「經脈」の「上注肺」に對應させ、「夾紿旁」の後に「經脈」の「連目系」に對應する「大皆旁」を補うべきだとする。「紿」の旁が「市」(四畫・フツ)であるならば、「紿」の別體であり、幫紐・月部である。この場合、滂紐・月部の「肺」とは聲母が同じ唇音、韻部は疊韻の關係となり、通假はほぼ間違いない。しかし、「大皆旁」を補わなければならぬとすれば、音韻關係での長所は半減する。『校釋』は「夾紿」を「大眦」の書き誤りとする。「夾」を「大」に書き誤る事は想定できるが、「紿」を「眦」に書き誤ることは可能性が低い。ただ、「紿」が「市」(五畫・シ)の諧聲字であるならば、「皆」や「漬」に近い。二説のどちらも難點を抱える。「大」の古音は定紐・月部である。これと雙聲疊韻であるのが「達」である。「大」が「達」の假借であるならば、「大皆旁」は「達皆旁」であり、「經脈」の「連目系」に對應する表現である。「達皆旁」と推定する。

(六) 少陰脈

少陰脈〔脈〕、穀〔繫〕於內踝〔踝〕外廉、穿臑、出臑〔郄〕【中】央、上穿脊之【內】廉〔i〕、穀〔繫〕於腎、夾舌本。【是動則病、】悒悒〔悒悒〕如亂〔ii〕、坐而起則目瞑如母見、心如懸〔懸〕、病飢、氣【不足】、善怒、心腸〔惕〕、恐【人將捕之】、不欲食、面黧如地〔地〕色〔iii〕、效則有血、此爲骨蹶、是少【陰】脈〔脈〕主【治】。其【所產病、口熱】、舌析〔垢〕、噤乾、上氣、體〔咽〕、噤中痛〔iv〕、癰、耆〔嗜〕臥、效、音〔瘡〕、爲十病。【少】陰之脈〔脈〕、【久〔灸〕則強食產〔生〕肉、緩帶】、被髮、大丈〔杖〕、重履而步、久〔灸〕幾息則病已矣。

(i) 上穿脊之內廉——『張家山本』は「脊」を「責」に作る。『校釋』は「張家山本脊作責、形近致訛」という。『校釋』はまた次句「繫於腎」において「腎」を『張家山本』が「腎」に作ることにについても「音形均近而致訛」という。「脊」「責」についても文字が異なる原因として字形の類似の他に、音韻の類似も考慮の要がある。「脊」は莊紐・錫部（陳復華・何九盈『古韻通曉』は精紐・錫部）、「責」は精紐・錫部である。「脊」「責」は少なくとも準雙聲・疊韻の関係にあり、『古韻通曉』によれば雙聲・疊韻である。『校釋』は「繫於腎」における「腎」「腎」について「上古音屬禪定準旁紐、眞文旁轉」という。準雙聲・疊韻であっても旁紐・旁轉よりもはるかに音韻的に近く、雙聲・疊韻であればなおさらである。「脊」「責」の相異の原因として字形の類似を否定するものではないが、それ以上に音韻的關係の存在が原因であると推定できる。

(ii) 悒悒如亂——『病法』『帛書』『脈書校』『校釋』は『甲本』の「悒」にあたる字を「恟」と読み、「喝」と解す。

『研究』は「勺は勺に同じく、喝に通ずる」という。『古今韻會舉要』去聲九泰は「勺或通勺」といい、「恂」が「勺」を聲符とする形聲字であれば「喝」に通じる。「恂」と讀まれる字は、『帛書』の圖版で偏の「卜」はほぼ確實であるが、旁が不明瞭である。まず、「恂」と讀まれる字の中央上段から「卜」に向けて斜め左に流れる旁の第一畫と思われる線がある。その旁の中央から僅かに右に傾斜しつつ下方に長く伸びる縦の一畫がある。また、旁の右肩から脇にかけての部分アルファベットBの右側に似ている。この三點の特徴を兼ね備える文字を『文字編』で検索すると、五二二頁「絶」字に見える『足臂』二二行の「絶」字の旁「色」は候補として申し分ない。本稿は「恂」と讀む。『張家山本』は「恂」を「恂」に作る。「亂」は『張家山本』に従うもので、『病法』『帛書』は「喘」に作る。『病法』『帛書』が「喘」と讀む字は、『帛書』の圖版で最上部が「與」や「學」の上半（又手「日」の間に何かを挟む形）に似、中ほどは「内」に似、下部は「子」である。「亂」の偏は、下部を「子」に作るものがあり（『文字編』五九〇頁）、中ほどには「巾」に似る部分があり（「内」に通じる）、上部には又手の左半「E」がある。これらの共通要素から、『病法』『帛書』が「喘」と讀む字は「亂」の異體字と推定する。

この四字を「經脈』『甲乙經』は「喝喝而喘」に、「經脈連環」は「喝喝如喘」に、『脈經』は「喉鳴而喘」に作る。『張家山本』の「恂恂」は同じものが『素問』刺瘡篇の足厥陰の瘡に「意恐懼、氣不足、腹中恂恂」と見えるが、『太素』卷二五「十二瘡」は「意恐懼、氣不足、腸中邑邑」に作る。「邑」と「恂」は諧聲に依る通假である。「脈解篇」の少陰の條には「喝喝」に對應する文字を「色色」に作るが、これを「邑邑」に作るべき事については吳崑『素問注』や張介賓『類經』卷一四「六經病解」が指摘し、『太素』卷八「經脈病解」は「邑邑」に作っている。⑩古典文獻にも「色色」を「邑邑」に作る例がある。⑪「邑邑」が「色色」に作られる事例は、「恂恂」が「恂恂」に作られる事を示唆する。『甲本』の「恂恂」は「恂恂」と類似し、「脈解篇」の少陰の條の「色色」と同系統の表記と考えられ、『張家山本』の「恂

「悞」に通じると言える。とすると、同じ内容を表すであろう表記として「喝喝」「悞悞(邑邑)」「色色」「悞悞」「喉鳴」が存在することになるが、これらはどのような関係にあるのか改めて見てみよう。

「喝」と「鳴」については、「鳴」を「喝」に作る例が他にも見られる。^⑩「鳴」と「喝」の字形の類似を契機とする誤寫に依ると推定できる。同じく字形の類似を契機とする誤寫によると推定できるのは「色」と「邑」であり、同じ事が「悞」と「悞」にも言える。「悞」は現在まで傳承されていないので正確な古音を知ることができないが、「昭」のように音韻的には「絶」の旁(絶の省の聲)に従うと考える。すると、「喝」は曉紐・月部、「悞」は影紐・緝部、「色」は山紐・職部、「悞」は從紐・月部、「喉」は匣紐・侯部、「鳴」は明紐・耕部である。六字の間で音韻的な関係があるのは、「喝」「悞」の疊韻だけのようである。なお、「色」は「々(人)」と「口」に従い、「絶」の旁「色」は「刀」と「口」に従って、両者は異なるものである。「悞」と諧聲字と思われる「昭」の別體は「脆」であり、「色」が「危」と表記される。「危」は「々(人)」と「厂」と「口」に従う。「喉」の旁「侯」の本字「侯」は「々(人)」と「厂」と「矢」に従う。「口」と「矢」は楷書では全く異なるが、崩した小篆では「口」は「巳」に似、「矢」は「天」「王」に似る。「王」の縦の一畫を左へずらせば「E」に似て、これは「巳」との違いは僅かである。と言うことは、「侯」は「危」の誤寫であり、「喉」は「昭」の誤寫と考えられる。「悞」と同じように傳承されなかった「昭」が存在したのではなからうか。

以上を整理すると、「喝」「鳴」グループと「色」「悞」「昭」「喉」「邑」「悞」グループに分けられる。兩者をつなぐものは「色」(絶の省の聲)と「喝」が疊韻ということである。そこで、資料的に古い『甲本』が「悞」に作り、『張家山本』が「悞」に作り、「脈解篇」が「色」に作り、これらと比べれば資料的に新しい「經脈」「甲乙經」「經脈連環」が「喝」に作り、『脈經』が「喉」に作ることから、古くは「悞」「昭」「色」あるいは「悞」「邑」に作り、後に「悞」から音韻的に「喝」に變化し、「昭」から字形的に「喉」に變化し、「喝」から更に「鳴」に變化したと推定する。ただ、

「悒」「啑」「色」と「悒」「邑」のうち、どちらが古いかは不明である。中國古典一般としては「悒悒」「邑邑」の用例が多いことからすると、「悒悒」「邑邑」が最古で、字形的に「悒」「啑」「冽」に變化したという推定が可能である。「悒悒」「邑邑」の意味としては、(1)「不舒之貌」すなわち、通常の呼吸ができない、呼吸がつかえ滞る、(2)「憂逆短氣貌」(郝懿行『荀子補註』)すなわち、苦しく呼吸困難な状態、(3)「微弱貌」すなわち、呼吸が通らず微弱である、これらのいずれかであろう。「悒悒」「啑啑」「色色」の意味としては、「啑」「啑」「色」の使用例が残っていないので直接的にはわからない。

「喝喝」も醫書以外には見えないようであるが、「喝喝」を「介介」に作る例がある。^④「介」は見紐・月部で、「喝」とは聲母が隣紐かつ疊韻の関係にあり、両者は音韻的に通假している。『太玄』僉次七「僉禍介介」の范望注は「介介、有害也」、司馬光注は「介介、僻邪之貌」である。これを人體の状況に當てはめれば「異常」と言うくらいの意味と思われる。『後漢書』馬援傳に「但畏長者家兒或在左右、或與從事、殊難得調、介介獨惡是耳」とあり、李賢注に「介介猶耿耿也」とある。「耿耿」は、ここでは「不安貌也」すなわち「何か氣になることがあってすっきりしない」と言う意味である。これを人體の状況に當てはめれば、引っかけりを感じる不快感という様な意味であろう。「而」「如」の通假は古典においてしばしば見られるものである。

(iii) 面黤若地色——『乙本』は『病法』『帛書』によれば「若地」を「如地」に作る。『張家山本』は「黤」を「黯」に作る。「面黤若地色」、「脈解篇」「經脈連環」は「面黑如地色」に、『甲乙經』『脈經』は「面黑如炭色」に、「經脈」は「面如漆柴」に作る。「黤」は影紐・談部、「黯」は影紐・元部で、両者は雙聲である。「黤」は「闇」と通假し、^⑤「黯」は「闇」は諧聲字であるから、「黤」と「黯」も當然通假と考えられる。『說文解字注』十篇上には「黤、果實黤黯黑也、从黑夨聲」とあり、「黤」「黯」が聯綿字として使われている例からも、両者の音韻的親近性が伺われる。「脈解篇」な

どが「驗」を「黑」に作るのは、『説文解字注』十篇上の記述から意味的な類似性に基づくと推定できる。「漆」も「漆黑」「漆墨」と熟して暗黒を形容することから、「驗」を「漆」に作るのも、意味的な類似性に基づくものであろう。「地」が「也」の諧聲字であるならば、『説文解字注』十篇上に「地、燭盡也、从火也聲」とあり、「地」は「也」の諧聲字で、「地」「地」「地」は普通による通假と考えられる。また、「地」が「炭」の諧聲字であったとしても、「也」は餘紐・歌部、「炭」は透紐・元部であるから、「也」「地」の韻部は陰陽對轉の關係にあり、通假が推定できる。「也」と「炭」「地」と「炭」の通假も當然推定できる。「柴」は崇紐・支部ないし從紐・支部、「色」は山紐・職部で、音韻的には二字の聲母が旁紐の關係にあるが、これに依って「柴」「色」が通假しているかどうかは不明である。

(iv) 其所産病、口熱、舌垢、噤乾、上氣、饑(咽)、噤中痛——『甲本』、「所」字は最上部と旁の一部を除いて缺損し、「産病、口熱」四字を全缺する。『乙本』は「産病、口熱」から「舌垢、噤乾、上氣、饑」までの一二字を脱落する。「其所中痛」一六字は『張家山本』に従う。「經脈」「經脈連環」「甲乙經」「脈經」は「口熱、舌垢、噤乾、上氣、饑、噤中痛」に相當する部分を「口熱、舌乾、咽腫、上氣、噤乾及痛」に作る。この内、「口熱」「上氣」二者は共通し、「噤乾」「噤中痛」と「噤乾及痛」も同じ病候を表すと思われる。「舌垢」と「舌乾」は「舌」が共通するが、「垢」と「乾」は音韻的には關聯しない。『校釋』が指摘するように、「垢」の諧聲字「垢」には「燥裂也」という意味があり、そうであるならば「乾」と「垢」は「乾いて裂ける」ことを意味し、「舌垢」と「舌乾」が關聯する病候と考えることができる。「饑」について、『病法』『帛書』は「噎」の假借とする。『説文解字注』二篇上に「噎、飯窒也、从口壹聲」とあり、食物がのどにつまることが原義である。『廣韻』入聲一六屑には「噎、食塞、又作咽」とあり、また『楚辭』九思「遭厄」には「思哽饑兮詰詘」とあり、補註に「饑、一作咽」と云う。従って、「饑」「噎」「咽」は通假し、その「饑」「噎」「咽」の原義は食物がのどにつまることである。しかし、『古今韻會舉要』入聲九屑の「咽、聲塞也」は、

「咽」すなわち「饅」「噎」にのどがつまって聲が出ないという意味があるとする。少陰脈の「饅」はこの「咽」「噎」であり、『陰陽』から「經脈」などに至る過程で「咽」に作るテキストがあったと思われる。それは「聲塞也」を意味したが、傳承の過程でそれが途絶えて單に「のど」を意味すると解され、それでは病候として不適切なので、「腫」を加えて「咽腫」としたのではあるまいか。あるいは「咽」が「聲塞也」の意味で傳承されたとしても、それは「咽腫」により引き起こされると考えることができる。いずれにせよ、「饅」「噎」と「咽腫」は關聯する病候と言える。以上により、『陰陽』の「口熱、舌垢、噤乾、上氣、饅、噤中痛」は「經脈」などの「口熱、舌乾、咽腫、上氣、噤乾及痛」に引き繼がれていると推定できる。

(七) 臂鉅陰脈

臂鉅陰脈〔脈〕、在於手掌中、出內陰兩骨之間、上骨下廉、筋之上、出臂【內陰、入心中】。是動則病、心滂滂〔彭〕如痛 (i)、缺盆痛、甚【則】交兩手而戰、此爲臂蹶〔厥〕。【是臂鉅陰脈〔脈〕主】治。其所産病、胸〔胸〕痛、癭〔幹〕痛、【心痛】、四末痛 (ii)、段〔瘦〕、爲五病。

(i) 是動則病、心彭彭如痛——『乙本』は『帛書』の圖版で「心」字が不鮮明であり、「彭彭」を「滂滂」に作るが、始めの「滂」字の下半および踊り字と「如」字を脱落する。『張家山本』は「滂」を「彭」に作る。「經脈」『脈經』は「肺脹滿膨膨而喘咳」に、『甲乙經』は「肺脹滿膨膨然而喘咳」に作る。「滂」は滂紐・陽部、「彭」「膨」は竝紐・陽部である。「彭」「膨」は雙聲・疊韻、「滂」と「彭」「膨」は旁紐・疊韻で三字は通假する。「滂滂」「彭彭」「膨膨」は同

じ意味内容を持つはずであるが、これまでの解釋は「滂滂」そのものの用例か、「經脈」などの「肺脹滿膨膨」に依據するものであった。『病法』『帛書』は「滂滂」について「流蕩狀」と解し、『研究』は「滂滂」について「蕩々に通ずる。ここでは心臓の鼓動の形容とみてよいだろう」と解し、『壹』は「滂滂」すなわち「膨膨」であるとして「張貌」と解し、『脈書校』は「彭彭」すなわち「膨膨」であるとして「形容胸内脹滿の様子」と解し、『校釋』は「膨膨」について「形容心跳激烈而伴有跳動之聲」とする。それぞれ、一定の妥當性を持つと考えるが、「滂滂」の諧聲字「傍傍」と「彭彭」とが同時に使われている『毛詩』小雅「北山」の「四牡彭彭、王事傍傍」に注目する。傳に「(彭彭、)彭彭然不得息、(傍傍)傍傍然不得已」とあり、「彭彭」を休息できない様子、「傍傍」を絶えることがない様子とする。「彭彭」と「傍傍」をこの様に區別するのは、主語が「彭彭」は生物、「傍傍」は事物という違いに由來する所が多いはずである。その違いを取り去れば、「彭彭」「傍傍」ともに聯續する様子を形容する言葉である。兩者は雙聲・疊韻であり、聯續する様子を形容する一つの音聲言語の表記上の相違に過ぎない。同じことが「彭彭」と「滂滂」にもあてはまる。そうであるからこそ、『甲本』『乙本』が「滂滂」に作り、『張家山本』が「彭彭」に作るのである。従って、「滂滂」「彭彭」はこの「彭彭」「傍傍」と解するのがより適切と考える。これによれば「心彭彭如痛」は「心臓(部)或いは心肺(部)が絶え間なく痛い」ということになり、「肺脹滿膨膨而喘咳」は「肺(部)あるいは胸部が膨滿して絶え間なくせき込む」ということになる。なお、「如」は「然」と解するのが適切である。

(ii) 其所産病、胸痛、翰痛、心痛、四末痛——『甲本』は「胸」を「胸」に、「翰」を『病法』『帛書』に依れば「瘧」に作り、「心痛」二字を原缺する。『乙本』は「翰」「末」を『病法』『帛書』に依ればそれぞれ「瘧」「婚」に作る。『張家山本』は「胸」「翰」をそれぞれ「胃」「腎」に作る。「胸」は恐らく「胃」「匈」の別體で、「胸」と通假する。「瘧」は影紐・元部の「怨」の諧聲字と思われ、匣紐・元部の「翰」や見紐・元部の「幹」との通假が考えられる。「怨」

の諧聲字と想定する「瘧」の通假字には多様な可能性が存在するが、「胸痛、瘧痛、心痛」と記述されることから、「瘧」の關聯する部位は胸や心肺部のあたりに限定される。「翰」と「幹」はよく通假し、「幹」は『爾雅』釋畜の「在幹蒺方」の注に「幹、脅」とあるように、胸部から背部にわたる肋骨のある部位を指す。また『儀禮』少牢饋食禮の「舉尸牢幹」の注に「幹、正脅也」、同書特性饋食禮の「佐食舉幹」の注に「幹、長脅也」とあり、「脅」はここでは肋骨を意味し、その肋骨を三分して前部を「代脅」、中部（わき、脇の下）を「正脅」（長脅ともいう）、後部を「短脅」と呼ぶ。上記『儀禮』の「幹」は半圓狀に灣曲した肋骨の中央部を指すが、肋骨全體をも意味することがある。「胸」や「心」に近い部位として「翰」「幹」は最も適切なものと考ええる。『張家山本』は「瘧」を「腎」に作り、「腎」は「瘧」と同じ部位を表すと考えられる。陽明脈で『甲本』『乙本』が「乳痛、心與臑痛」と作るものを、『張家山本』は「乳痛、腎痛、心與臑痛」に作った。陽明脈の「腎」を胸部・腋下・脇肋あたりと想定したが、これはまさに「翰」「幹」すなわち「脅」の表す部位である。従って、「瘧」すなわち「腎」は肋骨のある部分、あるいはその一部分を指すと考えて間違いないだろう。「腎」そのものの古代音は不明であるが、諧聲字の「瘧」「啓」と同じ溪紐・脂部であると考えられる。影紐・元部と思われる「瘧」との音韻的關聯は明白ではない。「翰」「幹」とは同じ舌根音で旁紐の關係にあるが、韻部については明確な關聯は不明である。「腎」と「瘧」、「腎」と「翰」「幹」、この二者の關係は意味的關聯を主とするといえるのではないか。

三 おわりに

山田慶兒氏は出土文獻に譯注を施す際の困難の一つとして、馬王堆出土醫書の寫眞がごく一部しか公表されていない

ことを『研究』の「まえがき」で述べた。馬王堆出土醫書のすべての寫眞を収録した『帛書』は『研究』とほとんど時を同じくして出版され、研究者に取って大きな朗報となった。『帛書』は八十七葉の寫眞を載せ、そのうち八十五葉はモノクロであり、カラーは八十五葉のモノクロの中から二葉だけを選んでカラー版として再録したものであった。これによって研究が新たな發展を遂げたことは言うまでもない。モノクロ寫眞でも寫眞がないよりずっと増したが、そこでもまた新たな困難が待ち受けていた。カラー寫眞では明瞭あるいは判讀可能な文字も、モノクロ寫眞では不鮮明で判讀できないケースがかなり存在するのである。カラー寫眞とモノクロ寫眞との差は『帛書』巻頭の『足臂』カラー寫眞と同じ部分を寫した三頁のモノクロ寫眞を對比すれば明らかである。馬王堆出土醫書全篇のカラー寫眞が待望される所以である。

『甲本』『足臂』『脈法』『陰陽脈死候』『五十二病方』前半は一枚の帛書に書かれていたことを既に述べたが、『五十二病方』後半は別の帛書に書かれていた。この二枚の帛書はそれぞれ折り疊まれ、長い年月の間に折り目が損耗し、三十枚の斷片（實際は折り目以外でも破斷した部分があるのでもっと大きな數字になる）として出土した。著名な醫史文獻研究者である小曾戸洋氏の最近の研究に『五十二病方』に就いて興味深いものがある。その三十二枚の斷片における墨の寫り具合から埋葬時にどのように折り疊まれていたか、推定できるといふものである。これは従來の研究者が全く氣附かなかつたことで、長年にわたり醫史文獻の研究に打ち込んでこられた小曾戸氏ならではの卓越した著想である。この成果を使うことにより、従來讀めなかつたところが解讀できる可能性がある。公表された小曾戸氏の研究は進展の途上にあり、更なる成果が期待できる。

本稿は『陰陽』に對して現段階で手にし得る資料を用いて可能な限りの検討を行った結果として得られた成果の一部である。『陰陽』のカラー寫眞や小曾戸氏の假説を用いることにより、將來さらに進んだ馬王堆醫書研究が行われる餘

地が残されている。

注

- ① 『靈樞』經脈・『太素』經脈連環・『甲乙經』十二經脈絡脈支別が記載する經脈の數は十二であるのに對し、『足臂十一脈灸經』『陰陽十一脈灸經』が記載するのはその名の通り十一脈である。相違は『靈樞』經脈等に見える心主手厥陰心包絡之脈に對應する手厥陰脈が『足臂十一脈灸經』『陰陽十一脈灸經』には見えないことである。これは、當初、十一脈であったものが、醫藥理論に陰陽五行説を採用する過程で時令説との適合性が求められ、時令説の枠組みである十二月に對應するように十二脈に増益しと推定できる。十一脈の場合、戰國期以前の文獻に既に記載される五臟六腑の合計十一臟腑と數的にうまく對應する。十二脈に増益する時に從來言及されることのなかった心包絡を加えた。なお、『脈經』卷六は心主手厥陰心包絡之脈を缺いて十一脈を記載し、『靈樞』經脈等が「心手少陰之脈」とするところを「手心主之脈」とする。『脈經』記載の「手心主之脈」が『靈樞』經脈等が記載する「心手少陰之脈」と「心主手厥陰心包絡之脈」に分離されたと推定できる。
- ② 『陰陽十一脈灸經』は無論のこと、馬王堆漢墓出土資料に關する釋文・研究などについては近藤浩之「長沙馬王堆漢墓關係文獻目錄」(『中國出土資料研究』創刊號、一九九七年三月)に詳しい。
- ③ 『孟子』梁惠王下の「春省耕而補不足、秋省斂而助不給」を『鹽鐵論』授時は引いて「而」を「以」に作り、『周易』繫辭傳下の「上古結繩而治」を王充『論衡』齊世は引いて「而」を「以」に作る。
- ④ 『史記』高祖功臣侯者年表の「繁」に「九年十一月壬寅、莊彊贍元年」とあり、『史記索隱』は「漢表作平嚴侯張贍、此作強贍」という。
- ⑤ 例えば、『素問』金匱眞言論に「故春善病飢衄、仲夏善病胸脇、長夏善病洞泄寒中、秋善病風瘧、冬善病痺厥」とあるものを、『太素』卷三「陰陽雜說」は「故春善病飢衄、夏善病洞泄寒中、仲夏善病胸脇、秋善病風瘧、冬善病痺厥」に作る。
- ⑥ 陰聲の之部に對應する陽聲は蒸部であり、陽聲の元部に對應する陰聲は歌部である。之・蒸對轉や歌・元對轉などの通常の陰陽對轉の枠を外れる之・元對轉のような語尾變化には用例を示すなどの配慮が求められる。
- ⑦ 「脈解篇」の足太陰脈に關する記述は次の通りである。「太陰所謂病脹者、太陰子也、十一月萬物氣皆藏於中、故曰病脹、所謂上走心爲噫者、陰盛而上走於陽明、陽明絡屬心、故曰上走心爲噫也、所謂食則嘔者、物盛滿而上溢、故嘔也、所謂得後與氣、則快

然如衰者、十二月陰氣下衰、而陽氣且出、故曰得後與氣、則快然如衰也。」

⑧ 『周禮』夏官・羊人に「凡沈辜侯禴釐積共其羊牲」とあり、注に「積故書爲眡、鄭司農云、眡讀爲漬」とある。

⑨ 『管子』立政の「雖有富家多資」を『春秋繁露』服制は「雖有富家多皆」に作る。

⑩ 所謂色不能久立、久坐起則目眊眊無所見者、萬物陰陽不定、未有主也、秋氣始至、微霜始下、而方殺萬物、陰陽內奪、故曰眊眊無所見也。

⑪ 所謂邑邑不能久立、坐起則目眊眊無所見者、萬物陰陽不定、未有主也、秋氣始至、微霜始下、而方殺萬物、陰陽內奪、故曰目眊眊無所見也。

⑫ 『荀子』哀公篇の「所謂庸人者、口不能道善言、心不知色色」を『大戴禮』哀公問五義は「所謂庸人者、口不能道善言、而志不邑邑」に作る。

⑬ 『素問』陰陽別論の「陰爭於内、陽擾於外、魄汗未藏、四逆而起、起則熏肺、使人喘鳴」を『太素』陰陽雜説は「陰爭於内、陽擾於外、魄汗未藏、四逆而起、起則動肺、使人喘喝」に作る。

⑭ 『甲乙經』卷九「寒氣客於五藏六府發卒心痛胸痺心疝三蟲」第二に「心効之狀、効則心痛、喉中喝喝如梗狀、甚則咽腫喉痺」とあり、『素問』効論篇は「喝喝」を「介介」に作る。

⑮ 『荀子』疆國の「黥然而雷擊之」を『韓詩外傳』卷六は「闇如雷擊之」に作る。

⑯ 「目で見る漢方資料館（一六〇）馬王堆漢墓醫書―『五十二病方』『養生方』（『漢方の臨床』第四八卷一〇號、二〇〇一年）。